

にしふたばちょう
西二葉町遺跡 (本発掘調査B)

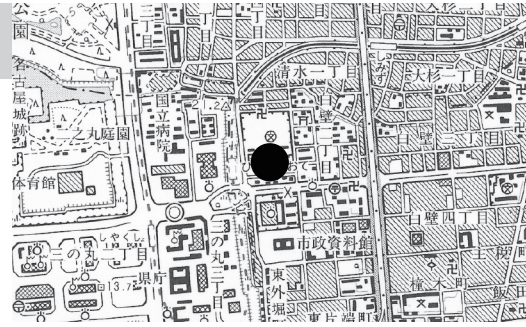
所在地 名古屋市東区白壁2丁目32番6号
(北緯35度18分34秒 東経136度90分95秒)

調査理由 明和高等学校校舎等建築工事

調査期間 令和7年5月～12月

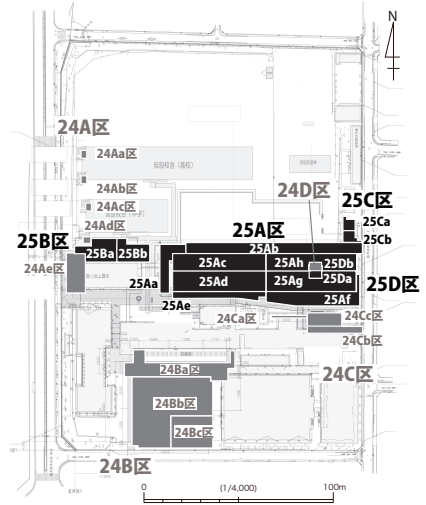
調査面積 3,646㎡

担当者 堀木真美子・川添和暁・柳原麻子



調査地点 (1/2.5万「名古屋北部」)

調査の経過 調査は愛知県教育委員会財務施設課による明和高等学校校舎等建築工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて、令和7年5月から12月にかけて実施した。調査面積は計3,646㎡で、学校旧北館跡および周辺エリアを25A区、西エリアを25B区、東門付近を25C区、通常とは排土処理の異なるエリアを25D区とした。調査の都合上、25A区はa～hの8区に、25B・C・D区はそれぞれa・bの2区ずつに、さらに区分けて実施した。



令和6(2024)年度調査区 令和7(2025)年度調査区
西二葉町遺跡 調査区位置図

立地と環境 当地では昨年令和6年度、すでに2,470㎡実施しており、今年度の調査は、2カ年目に当たる。

西二葉町遺跡は、名古屋市東区白壁に位置し、遺跡範囲は、愛知県立明和高等学校敷地から北東に鎮座する七尾天神社方面に広がる。当地の現地表の標高は15.5m、名古屋台地が北側に向かって傾斜する崖ぎわ付近に立地している。

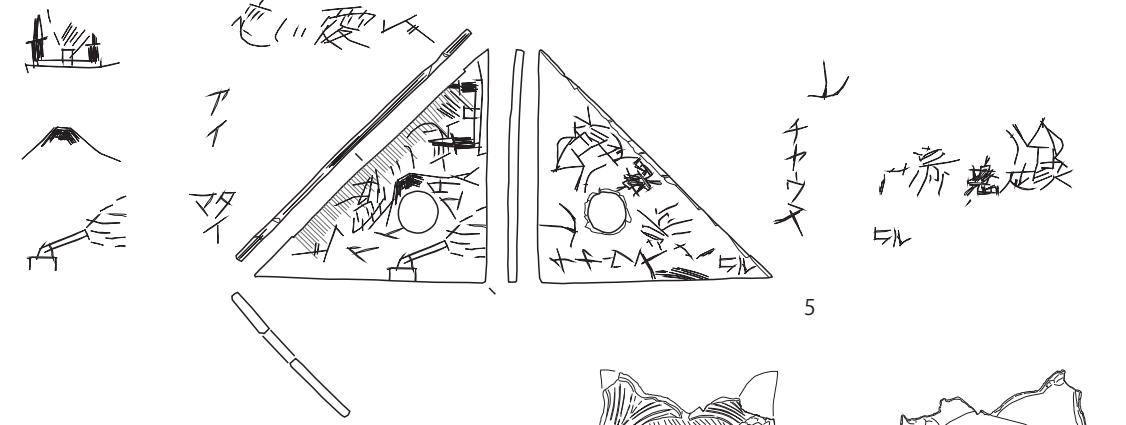
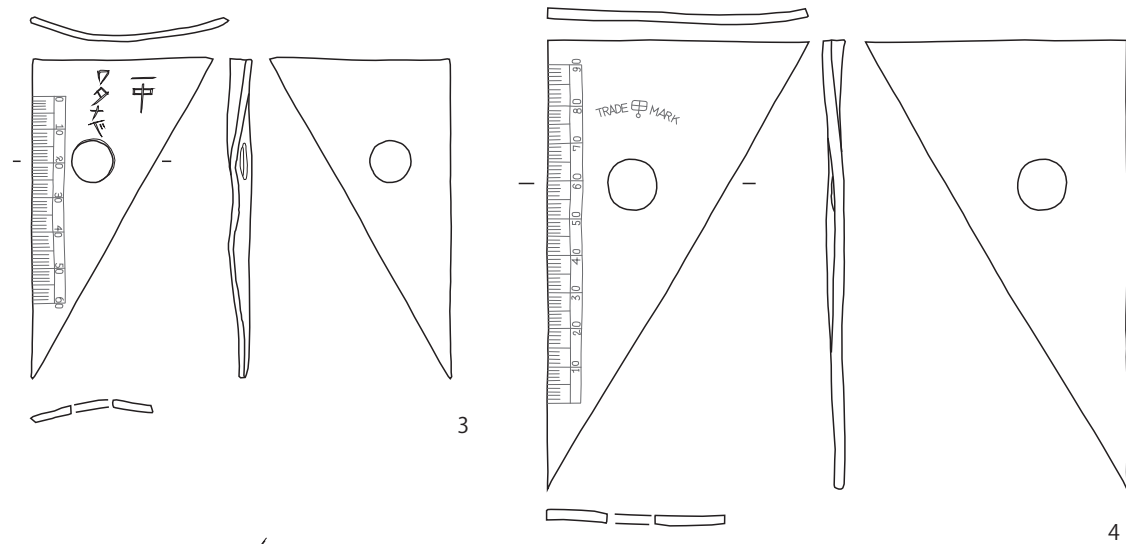
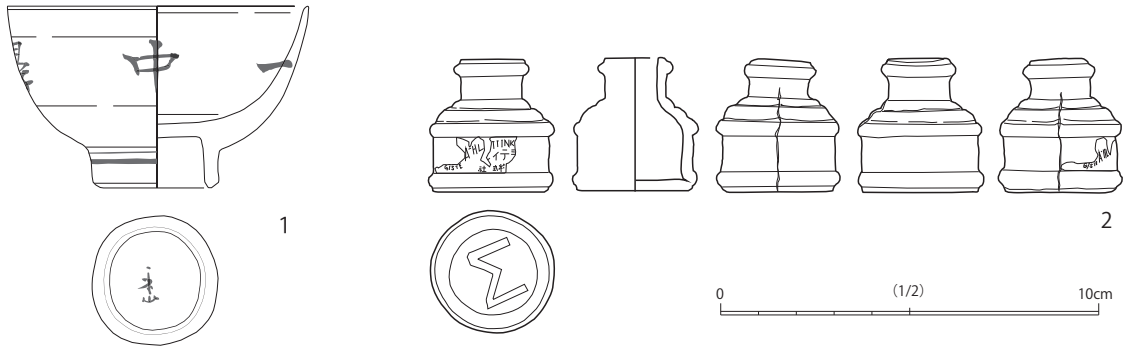
令和7年度 西二葉町遺跡 調査区別概要一覧

エリア	学校校内西		旧北館跡		東門		旧北館跡							
	北西端	北端	南側	北側	校舎基礎北隣接地		校舎基礎枠内			校舎基礎南隣接地				
区面積	25Ba	25Bb	25Aa	25Ab	25Cb	25Ca	25Ac	25Ah・25Db	25Ad	25Ag	25Da	25Ae	25Af	
時代	202㎡	200㎡	140㎡	507㎡	55㎡	55㎡	452㎡	460㎡	485㎡	480㎡	30㎡	150㎡	430㎡	
戦後	○グラウンド整地層、 ○食堂関係廃棄土坑、 ○愛知県第一高等女学校校舎基礎跡、 ○空襲焼土層	○愛知県第一高等女学校校舎和楽会館基礎跡、 ○空襲後廃棄土坑 ○空襲焼土層	○復興住宅基礎、 ○愛知県第一高等女学校校舎、和楽会館関連施設基礎跡、 ○空襲焼土層		○空襲後廃棄土坑		○空襲後廃棄土坑、 ○空襲焼土層		○愛知県立明和高等学校旧北館基礎跡、 ○愛知県第一高等女学校校舎基礎跡、および和楽会館基礎跡			○空襲後廃棄土坑、 ○空襲焼土層		
近代	○地下室(名帝大?) ○雨水排水路、橋	整地層	○愛知県立第一中学校舎基礎跡				○愛知県立第一中学校舎基礎跡(講堂・渡り廊下など含む)						整地層	○廃棄土坑群(愛知一中)
近世後半	○井戸、 ○河原石を列状に並べた溝状遺構、 ○柱穴	○井戸、 ○柱穴、 土坑	○整地層、 ○三和土による池状遺構、 ○陶管による導水炉	○整地層、 ○柱穴、土坑、 ○大型土坑群、 ○常滑焼瓦埋設遺構(水等窟か)	○柱穴、 ○大型土坑群	○大型土坑	○整地層、 ○柱穴、土坑、 ○大型土坑群、 ○布掘り溝 ○築山、 ○陶管による導水炉、	○整地層、 ○柱穴、土坑、 ○大型土坑群(地下室由来か)、	○整地層、 ○大型土坑、 ○布掘り溝	○整地層、 ○大型土坑、 ○布掘り溝	○三和土で形作られた池状遺構、導水施設、 ○築山、大型樹木の植栽痕、	○大型土坑群(軒丸瓦出土)	○築山、 ○大型樹木の植栽痕、 ○柱列(堀or柵列)	
近世前半	○地下室由来の大型土坑群、 ○柱穴、	○焼塩壺廃棄土坑												
戦国期														
中世	溝		包含層											
古代	遺物のみで遺構は未確認													
古墳	遺物のみで遺構は未確認													
備考			南半分は地山達せず											

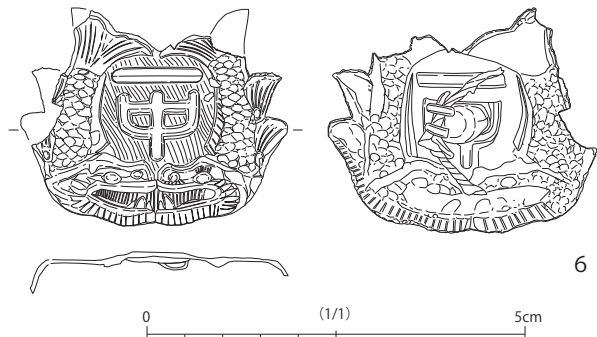
- 基本層序** 基本層序は、上からⅠ層：現代堆積層（20cm）、Ⅱ層：灰褐色硬砂層（10cm）【近代もしくは江戸時代堆積層】、Ⅲ層：褐色もしくは灰褐色砂層（60cm）【近世整地層】、Ⅳ層：灰色～黒色粘土層（20cm）【古墳時代～戦国期の耕作土・遺物包含層】、Ⅴ層：にぶい黄褐色シルト・粘土層（10cm）【漸移層】、Ⅵ層：黄褐色粘土層（熱田台地）【地山】である。なお、Ⅰ層の下層には空襲による焼土層が認められるところが多い。
- 調査の概要** 今回の調査では、工事との関係から、調査区を細切れに設定して実施した。その調査区ごとに調査内容をまとめたものが、14頁下の表である。今回の調査では、北館基礎枠内の25Ad区・25Ag区での遺跡の保存が良好であったことを特に記しておく。
- 古墳から中世前半** 昨年度同様に、今年度の調査では古墳時代以降の各時代の遺物が出土している。7世紀代の須恵器片や灰釉陶器は、近世以降の遺構から出土しており、原位置は保っていない状況であった。中世山茶碗片も近世以降の遺構から散在しているものがある一方、25Aa区および25Ba区ではⅣ層からの出土が確認されている。
- 戦国期** 戦国期から近世初頭に属すると想定される大型の溝が、旧北館基礎枠内25Ad区・25Ag区を東西に貫いて見つかった。昨年度24Ae区で調査された溝と同一のもので、検出レベルで幅3～4m、深さ2mを測り、断面はV字に近い形状を呈する。那古野城跡関連の遺構と推測されるものの、埋土内からの遺物の出土はほぼ皆無であった。
- 近世** この遺跡の主体は、近世以降である。近世は成瀬隼人正中屋敷関係の遺構・遺物がまわって見つかった。調査区西側の25B区では屋敷建物自体が、25A・C・D区では屋敷地裏の内容が調査された。調査の詳細については、18頁を参照されたい。
- 近代以降** 愛知県立第一中学校、名古屋帝国大学、愛知県立第一高等女学校、さらに愛知県立明和高等学校と、学校関係の遺構・遺物が調査された。これらに加えて、今回は戦後の復興住宅跡も見つかった。注目すべきは、上記の遺構が戦争による焼土層および整地層を含めて、層序的あるいは重複関係を保ちながら良好な状態で確認された点にある。
- 県立第一中学校** 25A・C・D区では、コンクリート基礎の上にレンガ積みの校舎建物基礎跡が全面的に見つかっており、渡り廊下の位置が推定されるような形で見つかったところもある。25Ad区・25Ag区では、基礎枠内の柱列の痕跡も確認されている。25Ba区で見つかった排水路とレンガ積みの柵も、当初は当時期に造られたもので、名古屋帝国大学期以降に作り替えられたものと考えられる。また、学校校舎配置の空白地であった25Af区東側では、廃棄土坑群が見つかり、磁器碗や三角定規がまわって出土した。
- 名古屋帝国大学** 名古屋帝国大学期と特定できた遺構として注目されるものに、25Ac区で見つかった、実験器具の一括廃棄された土坑がある。磁器乳鉢などの容器に加え、製作に失敗したガラス製試験管がまわって出土した。
- 県立第一高等女学校** 25B区および25Aa区で、コンクリート校舎基礎跡が見ついている。25Ad区では、講堂であった和楽会館の基礎が見ついている。レンガ積みの基礎であるが、県立第一中学校校舎のレンガを再利用しており、かつ第一中学校校舎基礎に重複した状態で見ついている。また、25Ab区では、和楽会館に伴うレンガ積み基礎の水周り施設も調査された。これらの建物は、愛知県立第一高等女学校として建てられたものであるが、明倫高等学校との合併で、すぐに明和高等学校となるため、明和高等学校初期の校舎跡ともいえる。
- 復興住宅** 25Ab区および25Cb区では、小型のレンガで積まれた基礎跡が調査された。一部第一中学校校舎基礎に重複した状態で見つかっており、建物配置などから戦後復興住宅跡と推定される。

(川添和暁)

茅 一 中 学 校

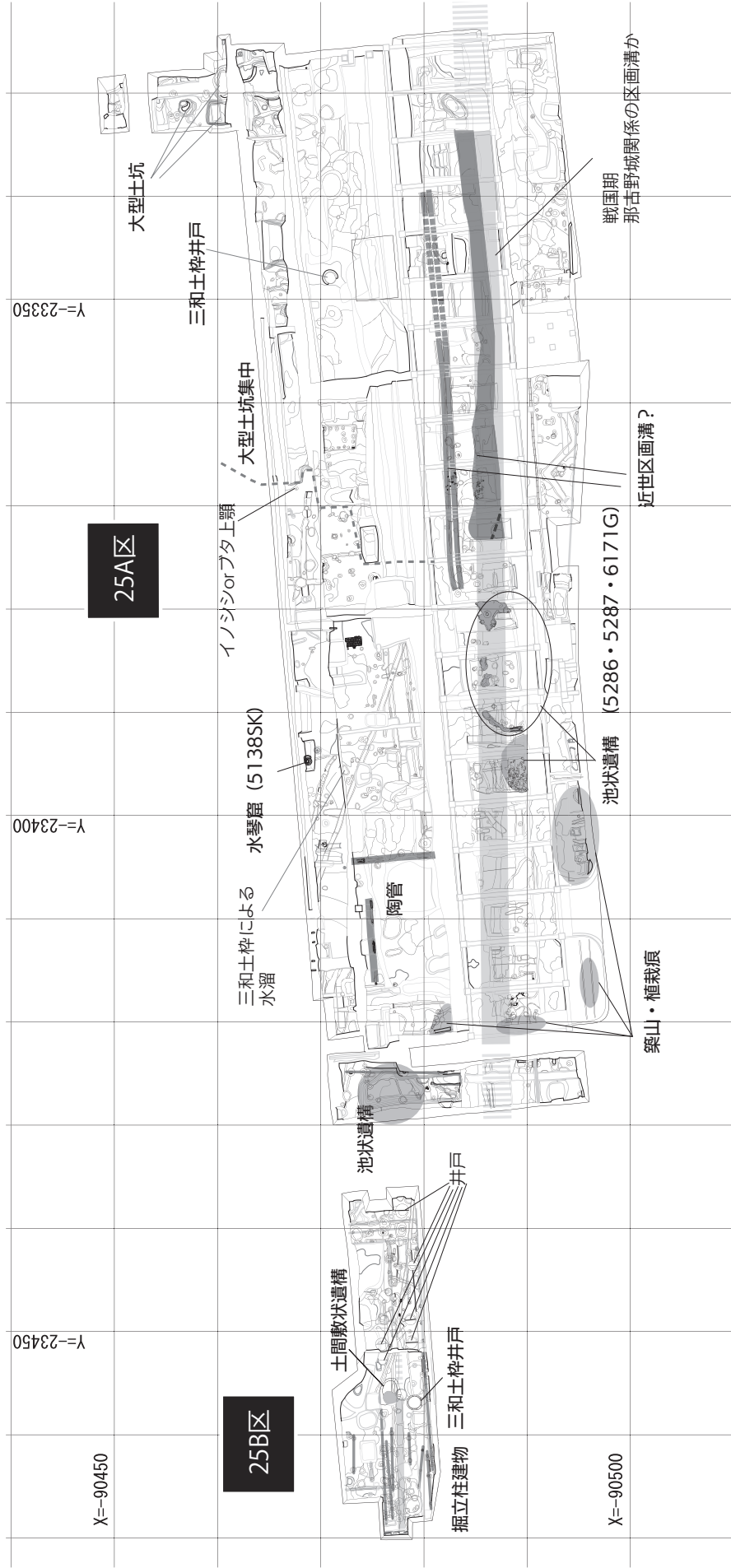


- 1：第一中学校 銘 磁器碗
- 2：インク瓶【ガラス製】
- 3～5：三角定規【セルロイド製】
- 3・5は線刻入
- 6：一中徽章【真鍮製】



愛知県立第一中学校関係遺物

- 近世の遺構の概要** 近世の遺構検出面は、確認された6面のうち2面(Ⅲ層・Ⅳ層)上面が該当する。本年度の発掘調査では、近世の遺構として、成瀬隼人正中屋敷に関連する礎石や井戸、地下室、庭園に関連する遺構(池状遺構、水琴窟、築山など)、大型土坑群、溝などを検出した。
- 犬山城白帝文庫所蔵の「成瀬隼人正中屋敷絵図1」(江戸時代後期)によれば、成瀬家の屋敷は名古屋城が位置する西を正面として、敷地の西側に位置する。今年度発掘調査を実施した25A～D区の中でも、西側に位置する25B区を除いて、調査区のほとんどが絵図から想定される屋敷の裏の空白地に該当していた。このことから、当初調査区は大型土坑などの廃棄場があったことが想定された。しかし、発掘調査では25A区の西部に池状遺構、水琴窟、築山など庭園を構成する遺構が集中して検出されたことから、庭園も営まれていたことが想定される。
- 25A・C・D区 庭園関連遺構** 池状遺構は25A区で4基以上を確認した。25A区で検出された池状遺構(5286・5287SG)は三和土によって構築される。三和土の範囲は東西に約13.0mを測る。5286・5287SGは不定形の平坦面が形成される。平坦面の側部には縁が形成され、中央には19世紀中頃の陶製盤が埋設されていることから、流水を中央に溜めていたと考えられる。この平坦面は幅0.7mの樋状遺構(6161SD)に接続する。樋状遺構も三和土によって構築され、陶管を伴う。池状遺構6171SGは、5286・5287SGと同地点の下層から検出された。東西約5.7m、南北2.5m以上を測る土坑で、底部に三和土の塊や18～19世紀の5～10cm大の瓦・土器片が密な状態で出土した。廃棄土坑の可能性も考えられるが、破片の大きさが均質で、平坦面を意識した配置であるため、意図的に配されたと判断される。水琴窟は25A区の中央北部で検出した。直径約0.7mの土坑内に常滑焼甕を天地逆に据えたもので、底部は破損しているが小孔のある底部片が出土した。築山は25A・C・D区の西部で計3基を確認した。5cm大の小礫あるいは50cm大の角礫や盛土で構築される。
- 区画溝** そのほか特筆すべき遺構には東西方向の溝3条がある。5414SDは全長40.0m以上、幅約2.0m、深さは検出面から約0.5mを測る。25A区では、調査区東部に戦国期と考えられる東西の溝が確認されたが、5414SDはこれを切る。5403SDと5394SDは近接し並行する。いずれも全長35.0m以上、幅約0.6m、深さ約0.4mを測る。名古屋城下を描いた近世の絵図(「享保十四酉年名護屋絵図」など)によれば、18世紀後半頃までは成瀬家屋敷地のある一区画の南部は他家の屋敷地であった。本調査で確認した東西の溝は、敷地を区切る区画溝であった可能性が高い。
- 25B区** 25B区は、「成瀬隼人正中屋敷絵図1」によれば屋敷の存在していた地点であり、近世の遺構が密集していた。特に柱穴が多く、東西方向に延びる柱当たりを数条確認した。これらは重複することから建物の建て替えがあった可能性が高い。また、調査区東部では土間状の遺構(4200SK)を検出した。土間の素材は硬化面を持ち、ワラ状の繊維が含まれる。そのほか、5基以上の井戸を確認した。うち1基(4199SE)は井戸枠に三和土を用いる。
- 出土遺物** 出土遺物の大半は大型土坑から出土し、陶磁器および瓦類が主体で、17世紀から19世紀に位置づけられる。陶磁器には茶碗、皿、徳利などが含まれ、墨書を有する資料も多い。年代の明記されたものとしては、「延享四年／御カ」の墨書土器がある。17～18世紀の焼塩壺も多数出土し、「サカイ／泉州磨生／御塩所」や「泉湊伊織」などの刻印が認められる。軒丸瓦には巴文、梅鉢文のほか、「丸に蔦」の家紋を確認した。これは成瀬家の家紋である「丸に片喰」とは異なり、別の氏族の由来が想定される。(柳原麻子)



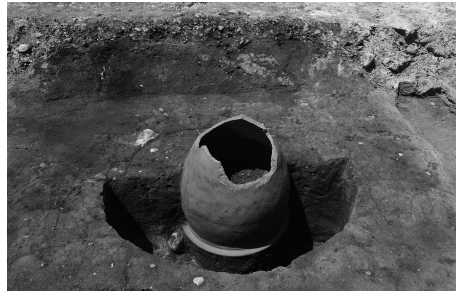
西二葉町遺跡の近世の主な遺構(2・3面目)600分の1



池状遺構 (6171SG)



池状遺構 (5286・5287G)



水琴窟 (南寄り)



三和土柱井戸 (4199SE)



25Ba区 第一高等女学校学校基礎と
雨水排水暗渠・レンガ積み柵 (東より)



25Ac区 名古屋帝国大学
実験器具廃棄土坑 (東より)



25Ab区 校基礎【愛知一中】と
戦後復興住宅基礎の重複 (東より)



25Ad区 愛知一中校舎基礎と
第一高等女学校和楽会館基礎の重複 (北西より)



25Ah区 愛知一中校舎基礎
渡り廊下脇の雨落ち部 (東より)



25Af区 愛知一中廃棄土坑出土遺物